

ICF 導入に向けた定期勉強会の成果と課題

き さ とし ろう¹⁾²⁾ さか い やす お たで ぬま たく²⁾
 木 佐 俊 郎 酒 井 康 生 蓼 沼 拓
 ま にわ そう きち まつ ぼら み わ にい がき み さ⁴⁾
 馬 庭 壯 吉 松 原 美 和 新 垣 美 佐
 すず き けん たろう¹⁾
 鈴 木 健太郎

キーワード：ICF，地域包括ケア，スコア換算表，適応，小児

要 旨

小児から高齢者まで地域包括ケアの推進に必要なツールとしての国際生活機能分類 (ICF) のコアセットが活用できることを目的に行った定期勉強会の成果と課題について報告した。

ICF のスコアと BI, FIM, FAM スコアとの換算表を作成し，評価法やカンファレンス運用に習熟することで，勉強会開始当初と比べ症例検討の所要時間が半減した。

ICF を使用するカンファレンスは，ICF に習熟した司会者が導けば，学生にも参加が容易であった。

ICF を使用することで対象事例の環境因子や希望 (参加意欲) を含み，行政も加わったゴール設定と援助・地域計画策定にまで役立つツールとなることが再認識された。

カンファレンス・リーダーは ICF の理念のつまみ食いではなく，評価項目・方法を熟知し，適応例には積極的に活用すべきと考える。

はじめに

地域包括ケアの対象には IADL: instrumental ADL (APDL: Activities of parallel to daily living 買い物のような生活関連動作) 困難者や就労

等の社会参加困難者のように，Barthel Index (BI) や FIM のような ADL のみの評価法ではとらえきれない障がい児・者も含まれる。

こうした症例には国際生活機能分類 (ICF)¹⁾が有用なツールになると考え，月1回1時間の研修会を重ねた1年間余りの経験と到達点について報告する。

対象と方法

参加を希望した出席者に対して，筆頭著者によ

Toshiro KISA et al.

- 1) 松江生協病院リハビリテーション科
- 2) 島根大学医学部リハビリテーション医学講座
- 3) 出雲市民病院リハビリテーション科
- 4) 益田医師会病院リハビリテーション科

連絡先：〒690-8522 松江市西津田8-8-8

松江生協病院リハビリテーション科